

から、これらの順序は省略したいと思ふし、またそれらに就いては『明暗』を見ていただきたい。八年位をこの彫刻練習に要した。『明暗』によると、印刷局のキヨソネのゐる部屋は教師室と呼ばれてゐて、其室の壁にはキヨソネのコンテ畫や川村清雄の小品などが懸つてゐたことである。どうして川村清雄の小品が懸つてゐたかといへば、川村清雄のイタリイ留學中に宇都宮三郎の推薦で、政府の留學生となつたためである。川村清雄は、明治十四年の歸朝とともに印刷局に入つたのであるが、キヨソネと意見があはなかつたために職を辭したともいはれてゐるし（木村駿吉著、川村清雄、大正十五年十二月）、また印刷局の女工と關係を生じたためともいはれてゐる。それはともかく、大震災のために、キヨソネの圖案、コンテ畫は焼失し、僅かに地下室の版面のみ残つてゐるかも知れないとのことである。黒部三記氏の話によれば、數年前三越で大山大將の遺物展の折、大山大將のコンテ畫の肖像があつたのであるが、それはキヨソネであつたとのことである。前記の大久保、三條公のキヨソネの彫刻をやはり、この機会に見せていただいて驚嘆したのであるが、かういつた明治初期の銅版彫刻が印刷局内に閉塞せしめられなかつた時の想像をふりすることができなかつた。

ここに掲出したキヨソネの寫眞は、前記の『洋風美術家小傳』よりとつたものであるが、よくキヨソネ晩年の風貌を傳へてゐることである。キヨソネは二十四年に印刷局を辭してから三十一年迄、ときに印刷局にきては彫刻をしてゐたのであるが、印刷局にあつては、キヨソネの後に外人を招聘せず、日本人のみでやらうといふことになつて、齋藤知三が主任となつた。知三は、素嚴の巖父であり、かういふ關係から、最近、瀧之川印刷所に素嚴のキヨソネの銅像が立てられることになつてゐることである。墓地は、明治洋畫の先驅者の一人、國澤新九郎とともに青山墓地にある。

『浮巢』正誤表

映及び副本序文	長塚	長塚
副本十一頁四行	四〇四頁の所載の	四〇四頁に所載の
同 十二頁十一行	る爪に	る水に
同 十四頁五行	る、爪ゆ	る、水ゆ
同 十五頁三行	茅刈り	茅刈り
同 同 六行	蕪	蕪
同 十七頁十一行	二荒山の山	二荒の山
同 二十一頁九行	「これらの歌は」次の「根岸の子規から」	
	七字抹消	

憲法史資料調査の旅

— 京都と土佐 —

鈴 木 安 藏

は し が き

私は昨年の初夏かねてより何かしら貴重な資料が未發掘のまま放置されてあるに違ひないといふやうな感じから一度訪れて見たいと考へてゐた土佐の高知市へ調査旅行に出かけることが出来た。その時の旅日記を一應纏めておきたいと思ひながら遂ひその手数をいとふて今日に及んだ。尤も部分的には多少書きもしたが。

この機會に——今まで發表したものと重複する箇所もあるが——覺書風のものを書きとどめさせていたから。

出 發

五月十八日(月) 快晴

夜尾佐竹博士宅へ參上旅行について種々と御注意を承る。今度の旅行は終始博士の御盡力によつて可能となつたのである。
歸途高野屋で果物を買つてゐると後から呼びかける人がある。島木健作君であつた。「會ひにゆかうか、手紙でも書かうかと思つてゐたところなのだ」といふ。何の用件なのか、ヂアスミンに入つて聞くこととする。

「實は明朝發行される『改造』に或る若い憲法學者を扱つた小説が發表されるがね、今憲法をやつてゐる××××主義者といふとあんたきりないんで、その小説があんたをモデルにしたなどと言ふやつが出て来るにきまつてゐるんだが、しかし小説家といふものは最初かういふ風に書かうと思つて書き出しても、最初の意圖とは關係なしに筆が進むものでね、その點を一應耳に入れておかう

と思つたのだが、何だこんなものを書いてなんていふことのないやうにと思つてね。實は別のものを書き出したかつたんだが途中まで書いたらとても七十枚や八十枚では纏りさうになく、それに締切が迫つて急いでそれを書くことにしたんで、發表する前に一應讀んでもらうとも思つたけれど、何せ時間がなくなつてね、あんなの書いたものなども讀んで書いたのだけだ。」

大體こんな風な話であつた。僕だつて嘗ては小説を書かうとしたこともあるのだから、小説家とモデルの問題、創作心理などについては大體理解してつもりであるなどと語り、それから土佐への旅行のことや舊友のことや時代の暗さなど、次々と話は盡きず、別れたのは十一時半過ぎであつた。

五月十九日(火) 雨

夜汽車の出發なので終日寢床、「改造」に發表された島木君の「若い學者」を讀む。矢張り發表前に一度讀ましてもらひたかつたといふ氣もしたが、しかしその際あゝのかうのと口出しをすれば創作家としては自分の創作衝動の正しい發露を不必要に妨げられもするであらうと思ふ。と結局全然交渉なしに發表したのがよかつたかとも思ふ。

ち込んだものも同時に入手されたとのことであつた。『規則沿革誌』の方を全部寫本を作らしていただく。數百枚になつた。

なほ吉野作博士所藏の『西哲夢物語』のコンニャク版摺のものが同大學法制史研究室にあつた。小早川助教が附近の古本屋で一圓五十錢かの拾得で買ひ求めたのだといふ。時價十五圓の三十圓のと稱せられる貴重資料、然も吉野博士が懇切に書き入れまでされてあるものである。どうして先生の本が京都の古本屋まで流れて來たのか——先生はよく惜しみなく藏書を貸與された方であるが、或ひは借り手が何かの拍子に古本屋へ賣り拂ひでもしてしまつたのではなからうか、とまれ研究室に收まつてゐるとすれば他の個人の所有になつてゐるよりは安全でもあり且つ廣く利用されることであるから結構であるが、本来收藏されてあるべき吉野文庫に之が缺けたことは残念と思ふ。

住谷悦治氏からは、その伯父さんが青年時代に愛讀されたといふスペンサーの『社會平權論』を惠贈された。その本は今日も手に入れるに、困難ではないが、珍重すべきは、その全篇にわたる書き入れ、圈點、朱線など、如何に同書を熱讀されたか、どんな感慨と共鳴とをもつて讀まれたかを物語る當時の民権家の手澤本たる點にある。「筆文章泣鬼神」とか「膽氣如虹萬丈橫」といふやうな文句が書きなぐられてゐる。折よく附近の古本屋で、この原書『ソウシア

五月二十日(水) 晴

昨夜雨のそほ降る中を出發したが、今朝琵琶湖のほとりは清々しく晴れてゐる。雨に濡つた大地の黒い中に青い草木が美しい。大地一面の霧である。その霧の中に比叡も比良も眠つてゐることく姿も見えぬ。

大津驛のプラットホームには、つゝじの花が燃ゆるばかり鮮やかに咲き開き、散り初めた花片があたりにこぼれてゐるのも美しい。降り立つて一つ二つを拾ひ上げ日記の間にはさむ。

君が魂たまこの花びらに籠らんと大津の驛につゝじ拾ひぬ

京 都

京都史談會の住谷悦治、絲屋壽夫その他の諸氏、立命館の磯崎辰五郎教授、同志社の田畑忍教授、京大の牧健二教授、小早川欣吾助教の諸氏の御好意によつて資料の檢索、文獻の蒐集に多大の便宜を得た。

牧教授自身入手されたといふ元老院編纂の『規則沿革誌』は珍しい資料であつた。公刊されたことのあるを聞かないから、政府内部での參考資料として祕藏されて居つたものであらうが、維新以後元老院迄の中央官制、公議所、集議院、左院の變遷を記録したものである。この外同じ元老院の記録である元老院議官の履歷書を全部綴

ル・スタティックスを見つけた。この外幸徳秋水「廿世紀之怪物帝國主義」、ヘンリー・デューヂの『ソウシアル・プロブレムス』など求む。(ヘンリー・デューヂのものは、宮崎民藏の研究には重要な研究資料になるものではないかと思つたが、その後未だ調べる折を得ない。)

京都滞在中の忘れたい收穫は、偶々來遊中のシュネーダー博士に會ひ得たことであつた。博士は永年東北學院に長としてミッションに寧日なき奮闘をつゞけられたが、最近院長を辭され、暫く歸國されるに際し、同學院の基金募集の遊説に上つてゐられたのであつたが、一日岳父栗原基の隱栖に見えられるといふので、私も參上した。博士こそは我が亡父良雄が約三十五年前、クリスト教に歸依した際洗禮を授けられたその人なのである。私が未だ小學校に入らない頃であつたらう、私たちの郷里に來られて、熱心に説教された博士の姿が微かに記憶に残つてゐる。神様といふのをカメラマ〜と慣れぬ日本語で語られたことをハッキリ覚えてゐる。爾來見ざることも二十何年で、この靈界の偉人に會ひ得るといふことは歡喜であつた。しかも父の三十三回忌をこの四月に郷里でいとなんだばかりであつたから、一層なつかしく覺えた。

因みに私の舊著『憲法の歴史的研究』を手にとられた博士が、所に散見する伏字を指して、何を意味するのかと不思議がられてゐる

だが、説明にも苦しみ、また説明しても博士には理解の出来ないこととらしかつた。言論、研究といふものについて全く別個な觀念の歐米人には伏字といふやうなものは謎か、然らずんば野蠻の象徴としかうつるまい。

博士に別れた翌日(五月二十九日)、朝來曙光を浴びて上加茂の丘腹から下り、一路高知に向つた。それに先立つて、十日近く滞留した京都の街舎宿舎の窓から東南北に仰ぐ比叡、大文字の山々は、何時もながら言ひがたい愛着と惜別とを感じさせられるものであつた。雨に煙る山々は一層深い哀愁を感じさせ、私はせめてもの思ひ出にそれを撮影して宿を出たのであつた。

土 佐

明治時代の民権家たちは、皆海を越えて高知に入ったのである。土佐は山國である。山又山に遮られて、陸路は殆ど不可能であつたらしい。しかし船に弱い私は自由黨の遺跡を訪ふ場合であるにもかかはらず、陸路を選んだ。昨秋から高松方面から高知までの縦貫鐵道が貫通したので、陸路の旅も容易となつた。

吉野川の溪流を遙か眼下に見下しつゝ進む窓外の展望は素晴らしいが、それにしても高松から六時間を古い汽車に揺られねばならないことは、可成り憂鬱なものである。一つは豫定の屋島の古戰場を訪

ふことも物憂く感じて中止してしまつたほど、旅慣れぬ疲勞の早い私の身體具合にもよるのであつたらうが。

九時半、南國らしく星が燦いてゐる澄んだ空の下に私は降り立つた。その昔紀實之の時代には、この高知停車場のあたりは一面に浦であつたらしい。驛前は、もはやひつそりとしてゐた。助役氏に刺を通じて静かな宿を世話してもらふ。

五月三十日(土)

昨夜の星にもかゝはず、朝から雨が降りしきつてゐる。土佐は全國でも一番雨量の多い所であるといふ。雨の中を圖書館に向ふ。

雨に濡映えた高知城の濠端は美しかつた。水蓮が白く赤く水に浮び、緑の芝生、深い水色にクッキリと際立つて私の眼を射るのであつた。私は宿の番傘をさして、その濠端傳ひに城門の方まで歩を運んで、雨中の異境の新鮮な、物なつかしい風景を心ゆくまで味はつたのである。

雨の色と青葉の色にひたりたる今日のまなこに日の暮るゝかみなながら、踵を返して縣立高知圖書館に向つた。圖書館は赤煉瓦の平屋建で、その雨に洗はれた赤色が、四圍の青葉に對比して、如何にも眼の醒めるやうな鮮やかな光景であつた。

中島圖書館長、小牧、長岡その他の館員諸氏の御盡力で、當館所藏の諸文獻、未發表の寫本類を閲覽し得たが、就中片岡健吉氏の所藏してをられた片岡建吉傳稿本その他の諸文書や植木枝盛自筆の自敘傳はじめ諸原稿などは甚だ貴重な資料であつた。この他林有造傳記稿本はじめ未だ東京で蒐集されてゐない明治十年當時の立志社關係の文書や機關紙類などこの旅行の主要收穫であつた。

圖書館に揃つてゐないもので、偶々一方堂なる土地の書店に集まつてをつたものに、十年八月発行の「海南新誌」(十一年一月「土陽雜誌」と合併されて「土陽新聞」となる)があり、賣價五十圓と稱してをつたが、研究のためならばと快よく貸與してくれた。

來て見て驚いたのであるが、東京で入手出來ず苦心焦慮してをつた諸資料が幾多殆んど何人にも顧みられぬまゝ埋れて存在してをるのである。東京の本屋が入りこんで大分買ひとつて行つたらしいが、研究學徒にしてこの賣の山に踏み入つたものは未だ嘗つてなかつたやうである。惜しい極みに感じられた。これも少しおそかつたなら、我々の眼に觸れぬうちに商賣人の手に買ひとられて夫々分散してしまつたであらうとの感が深かつた。館員諸氏の御助力を得て主要なものゝ寫本を作製することゝし、なほ若干寫眞に收めた。

五月三十一日(日) 快晴

昨夜の雨は何處へ行つたかと思ふばかりである。雄躍して浦戸灣を横切り、桂濱に向つた。大町桂月の名は、この濱に由来するといふ。今その記念碑が濱邊にある。また此處には、坂本龍馬の大銅像が巖頭に屹立して、太平洋を見渡してゐる。灣内を徐行してゆけば、嘗て板垣伯が全國の有志を引見した邸跡も見えるところであつたが、それは残念ながら逸した。龍馬の銅像の立つてる巖を下つて海際にいたれば、村の少女たちが餘念なく小石を拾ひ集めてゐた。同じ海際に過ぎない乍ら、東北の海邊に育つて常に海を眺めて來た私には、海そのものに對するなつかしさと、遙か南方四國の海邊に眺める太平洋の雄大さに對して感ずる新鮮さとが融合して、暫く低廻去りがたきものがあつた。砂上に仰臥して海を聞き雲を眺めた。

午後圖書館の小牧老の紹介で、立志社往年の闘士横山又吉翁(實木山樵氏)に會ふて、當時の社中の様子や植木枝盛やについて親しく時餘御聞きすることが出來たのも、得がたい收穫であつた。(この際の御話については何れ詳細に書きたい。)

餘談になるが自分は郷土人形に多少興味を持つてゐるので、探しに出かけた。昔、何とかいふ寺の坊さんが町の娘と戀に落ちた云々といふ傳説が、「土佐の高知のはりまや橋で坊さんかんざし買ふを見た」といふ傳説になつて残り、その坊さんと娘とが、はりまや橋

で逢ふてゐるところを人形にしたものが名物だとのことであつたが、俚語の愛すべき趣あるのに比して人形は餘りに俗悪、殊に芝居に出て来るナラズ者のやうな豆絞りで顔をつんだ坊さんなど見ても胸がわるくなるやうで、すつかり興醒めてしまつた。姫だるま人形も大して感心しない。たゞ着せかへ人形だけは情趣拘すべく、數種求めて歸つた。それから昔、立志社の闘士たちの時代まで、恐らく幕末維新の當時は言ふまでもなく、志士悲歌の巷であつたらうところの浦戸灣に面した遊里を一巡したが、これまた甚だ興醒めるやうなものであつた。美しきものは、灣頭に照る月のみであつた。

六月一日(月) 快晴

同じく小牧老の案内で高知城趾の板垣伯銅像に詣でて記念撮影をする。伯は晩年落魄裡に歿したが、今日においては全郷黨から追慕されてゐるやうだ。西郷南洲を別とすれば、かゝることは他に幾千あるであらうか？ 現に板垣會館の建設計畫が、着々進行中であつた。高知市は自由民権運動の聖地であつたにもかゝらず、今日まで一つの記念館もなく、諸遺跡も荒廢消滅のまゝに放つておかれ、近年漸く石碑が二、三建てられ、その由來、歴史が書きとめられてゐるにすぎない。天下の志士が一度は必ず訪れるを例とした板垣伯邸趾は跡片もなくセメント會社の倉庫傍きに朽ちてゐる。立志

社のあつた所は淺草か銀座かのごとき盛り場となつてしまつた。ゲーテ・ハウス、シラー・ハウスなどが生前そのまゝの形で保存されてゐるのに比して、これは又何といふ文化的無關心であらう！ 其中にあつて、板垣伯誕生地なる高野寺境内に記念會館の建立されるといふのは、せめてもの快報であつた。

六月二日(火) 快晴

中島町高野寺において板垣伯會館設立後接會の池田永馬理事や谷高野寺住職はじめ立志社時代の残存者島崎猪十馬その他二十餘氏と座談會を開き、當時の模様を聞くことが出来た。これまた意外な收穫であつて、文獻では掴み得ない具體的な知識、雰囲気などが、かうした會合では與へられる。老いたるものは自然の順序として逝く。私たちは、これらの人々の健やかなる間に、その記憶を辿り口述を残しておかねばならぬと思ふたのであつた。

立志社は全く士族の青年子弟の社で町人は殆んど入つてゐなかつたこと、最も愛讀されたものはスペンサーの『社會平權論』であり次でルソー『民約論』であつたこと、之らは老人から幼童にいたるまで手にせぬものはなかつたことである。「愛國新誌」第十八號に後樂處士の冬夜書感に左の如き賦のあるのも宜なるかなと思つた。

默均沈思殘獨前 苦難遭遇憶燭賢

寒威肌粟風霜寒

泣讀虛騷民約篇

またフランス革命史は、或ひは原書により、翻譯により、或ひは又翻譯小説によつて非常に親しまれ歓迎されたことなど、盡きぬ興味の感じられる話題が次々と出て來るのであつた。

何れも今は七十餘歳、若くて六十才を過ぎた老人ながら猶鑿鑿として往時を追懷しては一層意氣軒昂、「王侯將相豈種アランヤ」とか「ルイ十六世ノ末ヲ見ヨ」とか、パトリック・ヘンリーの「我ニ自由ヲ與ヘヨ然ラズンバ死ヲ與ヘヨ」などは、良く當時我等叫んだものなどなどと語る有様、我れら少年にとつては如何にも羨望に堪へざる體驗であるやうに思はれた。

會散して後、池田老の案内で板垣伯歸朝挨拶をせし小島のあたりを見て、夕刻浦戸丸に乗つて歸途につく。

浦戸灣より太平洋に出づる頃、やうやく波高く船の動搖はげしく、甲板に上ることもしなかつたが、船室から仰いだ月の光は又となく美しく、碎ける波の白いのを見つめてゐると、何もかも忘却のうち、快よい靜かさに何時しか眠つてしまつたのであつた。

この旅行が機縁となつて、其後同地方で發見された諸資料を入手するの便に惠まれたが、その最大な收穫は『東洋大日本國憲按』ないし『日本國々憲案』なる名の下に筆者不明のまゝ最も「過激ナル」憲

法私案として流布して來たものが、植木枝盛の起草せるものであることが判明したことである。植木の手記文書類の中から、その草稿が發見されたのである。また同じ文書によつて、かの『海南新誌』や「土陽新聞」所載の論説にして筆者不明のものが等しく植木の筆になることや、又一部分缺けて判然しなかつた箇所が、この文書によつて判明したことである。

京都および土佐での蒐集資料は、機會あり次第整理し公表するつもりであるが、私は此際繰り返へし、世の同學同好の士に、かゝる根本資料の消滅散佚せざるうちに、是非寫本を作るなり復刻するなり、せめては圖書館なり文庫なりに所藏し、以て研究の完成に寄與するやうにすべく、お互ひに調査涉獵を出來るだけ多くの機會において果したいものと力説しておきたい。

探す本

○ 山水隨緣記
(蘇峰 署名入限定版)

○ 支那漫遊記
(蘇峰在印 蘇峰 署名入限定版)

○ 墳墓
(蘇峰 署名入限定版)

東京小石川小日向區町二ノ四二一 山瀨勲木庵
 廣島縣立尾道商業學校・片山忠雄
 矢野峰人譯